

## はじめに——富士山を“危機遺産”にしてはならない！

富士山が世界文化遺産に登録され、日本中が喜びにわいた二〇一三年六月二十二日。当初は登録から外れると予測されていた三保松原が、大逆転での登録になり、地元を含めて日本中が喜びにわき、いっそう大きなニュースになりました。私は、カンボジアのプノンペンで開催された「世界遺産委員会」を傍聴しており、登録が決まった瞬間は、長年の念願が成就して、うれしくて、仲間とともに万歳三唱をしました。

しかし、現実の富士山は、単純に喜んでばかりはいられないという厳しい状況にあります。みなさんは、富士山の世界文化遺産の登録に伴って、難題といえる六項目におよぶ“宿題”が課せられたことをご存じですか？ 世界遺産の登録の審議に際しては、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）の専門家たちが、事前に富士山の現地を訪れ、念入りに申請した事実を調査・確認し、評価基準（ク

ライテリア)に照らし合わせて、登録の是非を判断し、問題がない範囲については登録の勧告を出します。しかし、未解決の問題があれば、後日、解決するように、宿題を出すのです。

富士山については、「登録が望ましい」と勧告したものの、二〇一六年の世界遺産委員会までに、この六項目の宿題に対して解決の見通しをつけ、改めて、それらの宿題を審査し再確認ができるよう、同年二月一日までに「保全状況報告書」の提出が求められました。

富士山は世界自然遺産としてではなく、世界文化遺産に登録されたのです。評価されたのは、富士山が持つ信仰、芸術、景観にまつわる類いまれな普遍的な価値であり、とくに富士山に内在する信仰性が高く評価されました。つまりこれは、富士山の「過去」の価値が評価されたことを意味しているのです。

同時に、イコモスからは、今の富士山が抱える多様な問題、例えば、環境保全や安全性の確保、開発の抑止、景観保護などの問題について、具体的に解決するための適切な対応策を明らかにしなさいとの厳しい指摘を受けていることとなります。

その宿題として、例えば、

- 国や県が作成した包括的保存計画を抜本的に見直すこと。
  - 富士山信仰の巡礼道として、統一感のある登山道を整備すること。
  - 入山制限について検討し、実施すること。
  - 登山者が引き起こしている流土への適切な対策事業を実施すること。
  - 富士五湖などの開発に対する制御の措置を行うこと。
- などの勧告や改善が求められているのです。

富士山が世界文化遺産に登録されてから一年が経とうとしている今、このように難しい「宿題」に対して、静岡県や山梨県によつて、進められている具体的な対応策としては、入山料(保全協力金)として、五合目以上への登山者から任意で一人一〇〇〇円を徴収するというものだけです。もしも、二年後の期限までに対応できない場合には、登録が抹消され、恥の遺産といわれている「危機遺産」に格下げになるおそれにも直面しているのです。

富士山は世界的に見ても、類いまれな自然美を有する「魅力的な山」です。遠くから眺

めると、美しい山容は昔も今も変わりません。しかしながら、実際に自分の足で登っていると、その現場ではさまざまな環境被害が拡大しているのを目の当たりにします。その詳しい状況は第二章で記しますが、目の前の富士山は「傷だらけの山」なのです。

それに加えて、山開きをしているわずか二か月間の登山者数は、二〇〇八年から毎年三〇万人前後に上り、多い日は一日一万人以上にもなります。昨年八月下旬に私も三回登って実感したことは、以前に比べて登山道が広がり、凹凸や浸食も激しく、登山事故の危険が増した状態になったということです。

私は、富士山の裾野にある静岡県三島市で育ちました。地元の人たちにとって、いつも身近に見える富士山は親しみを感じるものの、それほど特別な関心を寄せることはない当たり前の存在です。ところが、中学二年の夏休みに、初めて海拔〇メートルから頂上まで一人で登って、その大きさと五合目までの森林の素晴らしさに圧倒されました。

一〇日間かけて往復したのですが、夜は地元の人が家に泊めてくれて、お弁当や賽銭さいせんまで渡される。かわりに、私は山頂の富士山本宮浅間大社奥宮ほんぐうせんげんたいしやくおくみやでその人たちのために御札を

いただき、帰りに泊まった家に立ち寄って渡すのです。まさに富士信仰である「富士講ふじこう」の共助の仕組みの大切さを体験できた思い出が、現在の私の市民活動の思いや理念とつながっているかもしれません。

私が子どもの頃は、三島市は富士山から供給される湧き水が、美しい水辺の風景や環境を形成している、「水の都」と呼ばれていました。しかし、一九六〇年代以降、上流地域において産業活動が活発となり、地下水利用型の企業の進出が拡大。地下水が大量に汲み上げられるようになり、よく遊んだ川や湧水地から湧き水が消え、環境は悪化の一途を辿りました。

「水の都・三島」の環境再生を実現するためには、「恵みの山、母なる山」である富士山の環境保全が重要だという長期的な信念を持ち、まずは、足元の活動から始めることにしました。地元の水辺再生に着手するため、市民・NPO・行政・企業が連携した新たな地域協働型の市民組織である、「グラウンドワーク三島」を一九九二年九月に立ち上げたのです。まるでゴミ捨て場のように汚れていた源兵衛川げんべえがわを、ホタルが飛び交う美しい川に再生したり、三島のまちから消えた水中花・三島梅花藻ばいかもを復活させるなど、二二年にわ

たり三島市内六〇か所で市民たちによる実践的な活動を行い、環境改善の成果と実績を残してきました。

そして、私なりの市民活動のかたちが見えてきた一九九八年に、NPO法人「富士山クラブ」を設立。富士山のゴミやし尿問題に取り組み、多くの市民や企業の支援を受け、富士山の五合目と山頂に計三基のバイオトイレを設置しました。

今では「富士山学」という富士山に関わる総合的な新たな学問分野を提唱、発意して、私の職場である都留<sup>つる</sup>文科大学やその他の大学などで教えています。始めた当初、都留文科大学での受講生は、四〇人ほどでしたが、七年目を迎えた現在では、学生たちの富士山への関心と興味が高まり、一四〇人までに増えました。富士山を知ることによって、さらに自分の故郷の自然や地域資源、産業などのあり方に関心を寄せ、課題解決に対して問題意識を持つ学生が、それだけ増えているといえます。

このように二五年以上も富士山と関わってきて感じるのは、富士山は世界文化遺産として、本当にふさわしいのか、登録されてよかったのかという疑問と懸念です。今の富士山は、国内外の人々も認める素晴らしい魅力を内在している「光」の部分と、私たちが早急に対策を施すべき重々しい社会的課題といえる「影」の部分を併せ持っています。はたしてそのことが、どれだけ認識されているのか。

今回の世界文化遺産登録により、これまで以上に富士山に注目が集まっている今だからこそ、もつと多くの国民に富士山の現状と課題を知ってもらい、自分自身の問題として具体的に何ができるのか、どうしたらよいかを主体的に考えてもらいたい。そういう強い願いを込めて、富士山を取り巻く「光と影」について、綴っていきたいと思います。

## 【目次】

はじめに―富士山を「危機遺産」にしてはならない！ 1

## 第一章 日本人なら知っておきたい「富士山学」

- 真の姿を伝える「富士山学」 14  
富士山のなりたちと壮大な自然 26  
噴火の恐れから「富士講」という信仰へ 29  
地域に共助の仕組みをつくった「富士講」 32  
自然との共生を登拜て学ぶ 35

## 第二章 傷だらけの山・富士山が泣いている！

- 二本の道路の開通からオーバーユースへ 48  
スキー場の照明でコウモリが飢える 52  
社会の歪んだ構図が不法投棄の原因に 65  
かつての信仰の道にゴミを捨てる人々 70  
楽しむために山を傷つけ、動物の命を奪う 75  
伐採、植林によって荒廃する森の再生へ 77  
湧き水が減り、周辺の街が乾いていく 79  
バイオトイレなのに一〇万人分が垂れ流し 84  
レンジャーと救護体制の絶対的な不足 89  
自治体、国の行政機関による縦割りの管理 91

### 第三章

## どうしたら、奇跡の山・富士山を守れるのか

- 一向に進まない世界文化遺産の“宿題” 96
- 富士山の問題解決が、日本を変える 99
- 横のつながりを持つ富士山庁で一元管理 102
- “水の山”を守る環境税で森林再生 105
- 臨時のレンジャーを手配し、安全対策を 108
- ビクターセンターで入山規制と危機管理 121
- 富士山を教材に子どもたちに学びの場を 125
- 自然をチェックし、再生する準備を整える 129
- 屋久島の経験から見えてくる富士山の課題 131
- 利害を超越し、幅広い意見を集める組織を 135
- パートナーシップ型の新しい仕組みで 139
- 世界文化遺産を返上して、改めて出直す覚悟を 143

### 第四章

## 富士山と共生する喜び

- 言葉ではない言葉で、心を癒す“セラピスト” 148
- 森を歩き、自然の共生を実感する喜びを 152
- 闇夜の森で感じる、風の流れや動物の鳴き声 164
- 豊富な動植物が生きる富士の森を歩いて 168
- 美酒美食をいつまでも楽しむために 172
- 富士山を意識し、できる範囲のアクションを 175
- 富士山の一〇〇〇年先を見据えて 178

### 第五章

## 富士山のおきのおきの楽しみ方

### おわりに

193

富士山の多様な魅力をさまざまに味わって 186

カバー・本文写真●中川雄三

装幀●矢代明美

編集協力●宮下二葉

## 第一章

# 日本人なら知っておきたい 「富士山学」

## 真の姿を伝える「富士山学」

「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」。これが、二〇一三年六月二十二日に富士山が世界文化遺産として登録された正式な名称です。つまり、ユネスコに評価されたのは信仰の山である点と、芸術のセンスを刺激してきた景観です。でも、日本のシンボル、日本人の心ともいわれる富士山の価値はそれだけでしょいか。

富士山は、多様な価値が複合的、重層的にからみ合っている山です。文化、歴史、宗教性などを有し、地勢、地質、水理といった自然科学からの視点においても大いに魅力的で、さらには周辺に富士山の恵みをベースとした人々の暮らし、産業があり、経済や環境社会学の側面から考えてもたくさん要素を含み持っています。加えて、富士山の姿を見ることで心穏やかになり、裾野の森を歩くと気持ち落ち着くなど、日本人には神秘的ともいえる癒し効果までそなわっているのです。また、言い知れぬ元氣と勇氣を受けられる、巨大なパワースポットでもあります。

こう考えると、富士山は多数の学部を持ち、それぞれの学術的な分野が重なり合っている総合大学のようなものです。私は長年、富士山の現場に携わってきて、この複雑多岐な富士山の真の姿を理解してもらうためには、膨大な富士山情報を総合的、体系的に、たくさん「棚」に整理して、各分野の「棚」をひとつひとつ開けながら、人々に富士山情報を提供する必要があることに気づきました。これが「富士山学」の始まりです。

二〇〇四年から、富士山学の講座を始め、その四年後から山梨県の都留文科大学においても講義を開始し、さまざまな棚から富士山情報を取り出し、現在の富士山にもたらされた「光と影」——光は魅力や不思議、可能性であり、影は負の遺産や環境問題をはじめとした傷ついた満身創痍の状況——を伝えています。

「光と影」とは、喜びや苦しみのように、本来、私たちの社会や日常生活の中で生じているものです。そのような人間の現実的な有り様や社会問題を、富士山がそのまま背負ってしまっています。それなのに、多くの日本人は世界文化遺産登録を単純に喜び騒いでいるだけで、富士山で今、現実的に何が起きているのか、何が隠されているのかについてほと



精進峠よりの富士山をのぞむ



宝永4(1707)年に起きた宝永大噴火の火口 ©渡辺豊博

富士山の信仰、芸術、景観が  
世界文化遺産として評価された。

んどの人が知りません。厳しい言い方をすれば、知らないまま、もしかしたら「影」をつくり出す原因者にもなってしまうという皮肉な状況にあるといえるのです。

だからこそ、富士山の現実の姿を知ってもらい、とくに、影については残念に恥ずかしく思う反省の気持ちも、今後の自分自身の懺悔ざんげの教訓として生かしてほしいと思っております。学生たちには、「富士山学」を富士山の「光と影」の多様な情報を学べる場と短絡的にとらえるのではなく、つねに自分の故郷の問題と重ね合わせて考え、イメージするように伝えていきます。それぞれの故郷には、魅力的で美しい里山や森、川、水田、歴史的な建造物などがあります。しかしいずれも時代の推移とともに劣化、荒廃し、改変、消滅し始めてきているはずです。

その故郷の事実と富士山の事実は、同じような要因や原因により引き起こされており、相互の関連性と同類性が高いのです。富士山で起きているゴミやし尿問題、オーバーユース(過剰使用)による多様な社会問題は、日本全国の山や地域などでも起きており、非常に類似性が高い。そんなことから、「富士山学」で学んだことをベースに、富士山と故郷を改善、改良していくための具体的なアプローチとノウハウを学んでほしいと思っております。

\*写真クレジットのないものは、撮影・中川雄三



富士山本宮浅間大社奥宮。富士山 8合目以上は奥宮境内地であり、約 120万坪の広さとなっている。古来、富士山は富士山本宮浅間大社の御神体として崇められる神聖地である(写真提供・富士山本宮浅間大社)

荒ぶる山を仰ぎ見ながら、  
噴火という怒りが  
鎮まるようにと願った。



富士山本宮浅間大社。全国の浅間神社の総本社であり、富士信仰の中心地として知られる。「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録された。下の写真は本宮境内の「湧玉池」。この池は富士山の湧水が湧き出し、国の特別天然記念物に指定されている(写真提供・富士山本宮浅間大社)



河口浅間神社は、貞観大噴火の翌年に建立された。拝殿には「鎮爆」の文字が掲げられた額がある(写真提供・公益社団法人やまなし観光推進機構)

登拝信仰の中で  
「共助の仕組み」を作り、  
地域の一体化、団結力が図られた。

江戸の登山の様子を描いた「富士山諸人参詣之図」。歌川国輝画、慶応元年(1865年)。江戸時代の登山に関わる文献を見てみると、登山者は無理な登り方をせずに、5～8合目でご来光を拝んでいた(富士吉田市歴史民俗博物館蔵)



富士塚・品川富士。東京都内に現存する富士塚は、50ほどといわれている。品川神社内にあり、都内では最も高い15メートル級 ©渡辺豊博



山宮浅間神社。富士山をのぞむ遙拝所。全国に約1300社ある浅間神社の中でこの山宮浅間神社が最古と考えられている(写真提供・富士宮市役所)



金明水、銀明水。頂上のわずかな落差によって湧く御霊水。登拝者はこのお水を受けて浅間大神の御神徳を戴く。金明水(写真上)は、久須志神社の西北方、白山岳の麓に、銀明水(写真下)は、御殿場口登下山道の起点にある(写真提供・富士山本宮浅間大社)

「水の山」の恵みを  
守り続けなければならない。



白糸の滝。富士山の雪解け水が、絶壁から湧き出す。高さ 20m・200mの湾曲した絶壁から、大小数百の滝が流れ落ちる ©渡辺豊博



天然記念物である忍野八海。富士山の伏流水に水源を発する。この「湧池」は、湧水量が豊富で、深い水底の景観が美しい(写真提供・忍野村)

現実社会の中で自分自身が何ができるのか、何をしなければいけないのか、自らの社会的責任を明確にイメージしてほしいのです。そうすれば、富士山が変わるときには故郷も変わり、日本全体も変わる。受講生の若者たちには、その原動力、牽引役になってほしいと期待し、メッセージを送っています。

さて、富士山の影については第二章で詳しく説明しますが、こうした悲しい現状があるものの、言い換えれば、富士山は日本の人々に現在の社会の現実をわかりやすく知らしめることができる「生きた教材」ではないでしょうか。富士山は、当然、限りなく美しく素晴らしい山であると同時に、母なる山、恵みの山として我々に、「自分自身の社会的責任を的確に果たしなさい」と、優しく、厳格に「人間教育」を施してくれているように思えてなりません。



富士山信仰の代表的な絵画「絹本着色富士曼茶羅図」。室町時代の狩野元信による作品とされる。富士山信仰の代表的な絵画で、登山の情景や、駿河湾や三保松原なども描かれている(富士山本宮浅間大社蔵)

## 富士山のなりたちと壮大な自然

ここからは富士山の「光」について、その歴史と自然をご紹介します。

最近では、雑誌やテレビでもよく取り上げられているように、富士山はまぎれもない「活火山」なのです。現在は、静かに眠ったふりをしているだけで、近々に噴火してもおかしくないといわれています。国の中央防災会議の予測では、この三〇年以内で爆発する確率は、七〇%ともいわれています。世界でも数少ない玄武岩げんぶがんでできた巨大な成層火山であり、年齢は約一〇万年歳です。日本の火山の年齢は五〇万年歳〜一〇〇万年歳といわれていますから、富士山はまだ若い火山です。

記録に残っているもっとも古い噴火は、奈良時代の『続日本書紀』に記されている七八一年。その後、平安時代には三度にわたって大きな噴火を繰り返し、なかでも八六四年の貞観大噴火じょうがんは、のちの宝永大噴火ほうえいと並んで史上最大の噴火規模と見なされています。

平安時代以降は、一〇〇〜一五〇年ごとに噴火が起きていたのですが、一七〇七年の宝永大噴火を最後に、現在まで三〇〇年以上も沈黙が続いています。

標高三七七六メートルの富士山は、世界的に見ても有数の高山。裾野を広げた美しい円錐形えんすいの山容は、過去のたび重なる噴火によって一万年前から形成されてきたものです。富士山はこのたび世界文化遺産に登録されましたが、そのベースには世界自然遺産に匹敵する類いまれなる豊かな自然美を有していることが前提条件になっています。

とりわけ世界的な規模で素晴らしいのは、富士山の五合目以下に広がる森林地帯です。標高によって気象条件が大きく異なるため、一合目から登るに連れて森の表情、植物相が次々と変化していく様子が見られます。これを「垂直分布」と呼びますが、富士山から北海道まで移動したときに見られる森林・林相（森の種類・顔）の水平分布と同じ変化が見られ、かたや垂直に三キロ、かたや水平に一〇〇〇キロ近くという極端な距離の違いを考えると、富士山がいかに多彩な「自然の宝庫」であるかを実感できるでしょう。

この豊かな森林こそ富士山の最大の財産、価値であり、昔の人々はこの森林地帯の中を歩きながら壮大な自然に感嘆し、この森に身近に触れることにより、森の仕組みや大切さ、

人間との共生の関係や知恵などについて、自然に学んだのではないかと思えます。その森での学びと体験のプロセスが、富士山を登る本質的な意義・意味であり、富士山は私たち人間力を育成し研鑽してくれる「生きた教材」ともいえます。

しかし、一九六四年十月一日、山梨県側に富士スバルラインが開通して五合目まで簡単に車で行けるようになったことをきっかけに、富士山は「信仰の山」から「観光の山」へと、劇的に変わってしまいました。富士山観光が五合目観光となり、観光の一極集中化が始まったのです。大量の観光客が大型バスや車で富士山五合目に押しかけ、お土産物屋で買い物を楽しみ、トイレを済ませ、簡単に富士山頂を眺めて、裾野のホテルに宿泊する——こんな観光スタイルが富士山観光の定番になってしまいました。

この交通や登山アクセスの向上が、オーバーユース（過剰使用）を誘発し、環境問題などの拡大を助長したといえます。もつたいないことに、多くの観光客や登山者が目指すのは「はげ山」です。それは自然の面白みのない五合目から頂上までの区間であり、五合目の下に広がる魅力的な森を訪れる人は少なく、歴史的な古道はいつも閑散としています。まさに、富士山観光の本質性とは何かが問われ始めています。

## 噴火の恐れから「富士講」という信仰へ

富士山は万葉時代から「不二山」「不尽山」と書かれ、人々が崇拜し、畏敬の念とともに崇め眺める対象でした。「不二山」は二つとない美しき山、「不尽山」は素晴らしさの尽きない山といった意味でしょう。

確かにあの山容は、視界に入るだけで私たちの心を魅了します。ただ、富士山の存在が社会で大きく注目された最大の理由は、噴火を起こす活火山であったことだと考えられます。すでに述べたように富士山はたびたび噴火を繰り返しており、噴火の直前に大きな地震が発生したり、溶岩が流れると周囲の森や家、畑が燃えて、火山灰により川底が上がって雨が降ると氾濫するなど、さまざまな災害をもたらしました。さらに、大量の火山灰が噴き上がり、関東一帯から時には東北地方までも広範囲に飛び、太陽の光を遮り、農作物が大凶作となって飢饉を巻き起こしたこともありました。

このような厳しい事態に見舞われるたびに、日本人の潜在意識の中で富士山は噴火を引き起こす恐い山という思いが受け継がれ、荒ぶる山を仰ぎ見ながら、噴火という怒りが鎮まるようにと願ったのです。代表的な富士信仰といえは浅間信仰ですが、その拠点となる富士山本宮浅間大社は、十一代垂仁天皇が噴火のつめ跡を憂いて山霊を鎮めたのが起源とされています。また、貞観大噴火の翌年に天皇の勅命によつて建立された河口浅間神社は、拜殿に現在も「鎮爆」の文字が掲げられています。このように富士信仰の礎には、山体を崇拜すると同時に火を噴く山を鎮めたいという願いがありました。浅間信仰のご祭神は日本神話に登場する女神の木花之佐久夜毘売命で、別称は浅間大神。火の神であり、水の神ともいわれ、まさしくご神体である富士山を鎮める神です。

富士信仰において、富士山は長らく麓から仰いで祈る「遙拝」の対象でしたが、鎌倉、平安時代から一部の山岳修行者たちが登つて荒行をするようになります。室町時代に入つて火山活動が落ち着くと、修行者はますます増えていき、富士山は「登拝」する山へと変化していきました。

さらに、江戸時代には長谷川角行を開祖とする「富士講」が盛んとなり、各地から大勢の一般庶民が富士山に「登拝」するために集まりました。白装束に身を包み金剛棒を杖として、各地の水場・お浄め所で身を清め、一合目から徒歩で富士山に登つて神に近づくのです。険しい山道を進む苦しみの中で唱えるのは、「懺悔懺悔、六根清浄」の言葉。自身自身を見つめ直し、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を清めれば、罪が許され新しい自分に生まれ変われるという信仰でした。

## 地域に共助の仕組みをつくった「富士講」

「富士講」とは、富士山をご神体として組織的に富士山参拝を行う人々の集まりで、江戸をはじめ各地に数多くありました。当時の隆盛ぶりは「江戸は広くて八百八町、八百八町に八百八講」と謳われたほど。場所によっては自分の脚で往復一か月以上もかけ、道中、襦みそぎをしながら麓にたどり着き、修行をしながら登って下りてまた帰るといふ旅は、かなりの体力と費用を必要とします。そこで、地域や集落から代表者を選び、ほかのメンバーがお金や食料を出し合ってその人を富士山へと送り出しました。

私は「共助の仕組み」と呼んでいます。登拝信仰の中で助け合いの仕組みをつくり、地域の一体化、団結力が図られたわけです。遥か遠くではあっても、実際に自分たちの瞳がとらえる富士山の姿は明確な目標となって、助け合いの精神を育て、支えたことでしょう。

地域の代表として登拝した人は、頂上でメンバー全員分のお札をもらい、富士山の大きな石を拾って持ち帰って故郷の富士塚に積み上げます。そして、登拝者が富士塚を「懺悔、懺悔」と唱えて登ると、仲間たちは同じように後ろに付いて歩き、富士塚を見ながら実際に登った人の苦しみや喜び、感動をイメージして、ご利益を分配してもらうのです。

また、登拝者の身体に触れたり、いわゆる「ハグ」をして、自分に福、ご利益を呼び込みました。東京都内では方々にいくつも富士塚が残っていますが、その大きさはみんなで助け合い、代表者を送り続けた長い歳月の証。品川神社にある品川富士は都内でもっとも大きな富士塚で、現在は誰でも自由に登ることができます。

私は中学二年の夏休みに初めて富士山に登り、富士講の仕組みが地元の伝統文化やしきたりとして残っていることを体験することができました。沼津市の千本浜から直線距離で三五キロですが、須走口すしりぐちから御殿場ごてんばを通じて右往左往している道を、一〇日間かけて往復しました。歩いていると知らない人が車で駆けつけお賽銭を渡され、夜は地元の人たちが家に泊めてくれて高級な羽布団を敷き、翌朝にはお弁当まで作って送り出してくれる。地元の人たちにとって私は登拝の代表者だったわけです。代わりに、頂上の浅間大社奥宮で

たくさんのお札を買い、大きな判子を押ししてもらい帰りには配って歩きました。現在では、ほぼ消滅してしまった富士講ですが、いまだにそのごく一部が残って登山が続けられています。

こうなると、富士講は確かに富士山を信じる宗教ですが、同時に地域のコミュニティをつくり、団結力を養ってみんなで助け合う仕組みを学ぶ機会でもあります。富士山への出発に向けて愛郷心を強め、日本のシンボルに登るというコミュニティの目標が達成されると、富士山という日本の心に近づいた喜びが愛国心へとつながっていきます。私は、富士講は日本人としての国民意識を醸成するための、一種の社会教育活動だったのではないかと考えています。

何しろ日本の人口が現在の四分の一程度だった時代に、わずか二か月で二万人が一合目から歩いて登っている。しかも西日本は伊勢参りが主流ですから、ほとんどが東日本、なかでも関東地域の人たちが中心です。江戸中期は文化程度の高い、比較的豊かなバブルの時代でしたから、庶民の心をひとつにまとめて治安体制を確立する役割も担ったのではないのでしょうか。

## 自然との共生を登拝で学ぶ

登拝が盛んとなるに伴い、いくつかの登山道が開かれ、それぞれに登拝者の宿泊場所となる「御師<sup>おし</sup>」が作られました。登拝は「先達<sup>せんだつ</sup>」という修行僧が率い、神事を行い、いろいろな世話をしてくれます。「御師」では、先達が登拝者たちに富士講の意義や人間の生きるべき道を語り、安全な登山の方法や環境に負荷をかけない自然との共生の知恵を授けました。

例えば、登拝の際は現在の金額で三五〇〇円ほどの入山料を払い、杉チップを敷き詰めた小箱をもらって、道中はその中で用を足して持ち帰って行くことが決まりました。ご神体である富士山を汚すことなどもつてのほかであり、今でいう携帯用トイレを使っていたのです。先達は現代のエコツアーガイドやレンジャー（自然保護官）のような役割も担っ

ていました。

また、ツアーのように複数で登るためお互いを思いやり、助け合う気持ちも求められません。必ずしもみんなが同じようなレベルの健脚とは限らず、優しさを持って助け合わなければ目標を達成できません。こうして、幾多のことを学んだ登拝者たちは、各自の故郷へと散り散りに戻り、待っている仲間たちに教え伝えるのですから、富士山の登拝は日本人にとって旧き良き精神を学ぶ素晴らしい「人間教育」の場でした。観光レクリエーション化した、現在の富士登山のスタイルとはまったく異なる意味を持つていたわけです。

もうひとつ、私は世界文化遺産で「信仰の対象」としての富士山が高く評価されたのは、富士山の「多神教性」が最大の理由だと考えています。富士山は古来より霊峰と呼ばれた信仰の山であり、荒行を修めた修行者たちは山岳信仰と密教、道教の流れを組む信仰を持つており、富士講は仏教の流れをくむ新興宗教といわれています。室町時代後期の絵「絹本着色富士曼荼羅図」には当時の登拝の様子が描かれていますが、登山口には富士山本宮浅間大社、村山浅間神社とともに御室大日堂が、山頂には浅間大神のほか大日如来など三体の仏像が見られ、神道と仏教が混在しています。

まだ土着の信仰が中心だった時代、その違いから争いが起こる危険性はあつたはずですが、人々が富士山を拝み、求めたのは噴火をしないようにという鎮爆の願いからでした。そして、富士山信仰は、さまざまな宗教を統一した日本の宗教のように定義づけられ、どのような信仰を持つていても受け入れるという心の広さと寛容性を持ち合わせています。今の時代でさえ、世界各地で宗教の違いをきっかけに戦いや争いが起きている現実を考えると、富士山信仰は、当時からグローバルな精神と心の寛大さを備えていたことに誇りを感じます。

## ■富士山世界文化遺産の構成資産一覧

No.	名称	県名	所在市町村
1	富士山域		
	1-1 山頂の信仰遺跡群	山梨県・静岡県	
	1-2 大宮・村山口登山道(現富士宮口登山道)	山梨県・静岡県	富士宮市
	1-3 須山口登山道(現御殿場口登山道)	静岡県	御殿場市
	1-4 須走口登山道	静岡県	小山町
	1-5 吉田口登山道	静岡県	富士吉田市 富士河口湖町
	1-6 北口本宮富士浅間神社	山梨県	富士吉田市
	1-7 西湖	山梨県	富士河口湖町
	1-8 精進湖	山梨県	富士河口湖町
1-9 本栖湖	山梨県	身延町 富士河口湖町	
2	富士山本宮浅間神社	山梨県	富士宮市
3	山宮浅間神社	静岡県	富士宮市
4	村山浅間神社	静岡県	富士宮市
5	須山浅間神社	静岡県	裾野市
6	富士浅間神社	静岡県	小山町
7	河口浅間神社	山梨県	富士河口湖町
8	富士御室浅間神社	山梨県	富士河口湖町
9	御師住宅(旧外川家住宅)	山梨県	富士吉田市
10	御師住宅(小佐野家住宅)	山梨県	富士吉田市
11	山中湖	山梨県	山中湖町
12	忍野八海(出口池)	山梨県	富士河口湖町
13	忍野八海(お釜池)	山梨県	忍野村
14	忍野八海(底抜池)	山梨県	忍野村
15	忍野八海(銚子池)	山梨県	忍野村
16	忍野八海(湧池)	山梨県	忍野村
18	忍野八海(濁池)	山梨県	忍野村
19	忍野八海(鏡池)	山梨県	忍野村
20	忍野八海(菖蒲池)	山梨県	忍野村
21	船津胎内樹型	山梨県	富士河口湖町
22	吉田胎内樹型	山梨県	富士吉田市
23	人穴富士講遺跡	静岡県	富士宮市
24	白糸ノ滝	静岡県	富士宮市
25	三保松原	静岡県	静岡市

## “構成資産”でパワーを感じる

世界文化遺産として認定された二五の「構成資産」も富士山の光です。八割は神社仏閣など信仰にまつわる遺構で、なかでも富士山本宮浅間大社は各地に千三百余りある浅間神社の総本宮。地方にある浅間神社は関東地域が中心で、北は北海道松前町、南は三重県尾鷲市まであり、浅間信仰と富士講が結びついてこれほどまでに広がったようです。

富士山本宮浅間大社の本殿は二重の楼閣造、つまり二階建てになっています。日本の神社で同じく二階建ての建物があるのは、出雲大社と伊勢神宮だけです。一般的には非公開なのが残念ですが、本殿の内部は何もない空間で、奥の扉を開けた途端にご神体である富士山の崇高な姿が劇的に現れる。法律的根拠は一切ないのに、一千年以上も視野を遮る建築物が建っています。

また、現在の本宮浅間大社の前身といわれる山宮浅間神社も、構成資産のひとつです。

暗い森の中で灯籠が灯る参道を一〇〇メートルほど歩くと、四角い板が立っているだけなのですが、顔を上げると木々の間から富士山の秀麗な姿が見える。そこだけ木が切られ、富士山が見えるように演出されているのですが、とても神秘的で壮麗な演出が施されているといえます。

さらに富士山の八合目以上は山頂にある富士山山頂浅間大社奥宮の境内で、山頂には奥宮のほか金明水、銀明水という湧き水があり、ご霊水として祠ほこらが祀られています。登拝者はこの水を戴いてご神徳をいただきます。余談ですが、最近では富士山が世界最大級のパワースポットといわれ、不思議な力を求めて日本はもちろん世界から訪れる人もいます。

ところで、世界文化遺産として「信仰の対象」とともに評価された「文化の源泉」としては、枚挙に暇いとまがないほど文学や絵画の題材として取り上げられています。代表的な作品を挙げると、文学では古くは『万葉集』にはじまって『伊勢物語』『平家物語』。松尾芭蕉や与謝蕪村、小林一茶など江戸時代の俳句にも残されています。絵画では葛飾北斎の浮世絵「富嶽ふがく三十六景」をはじめ、安藤広重、尾形光琳、横山大観たちが思い思いに名峰の

姿を描きました。

芸術はインスピレーションを感じた人が、詠み、描いてきたものであり、その背景にあるのは富士山の類いまれなる美しい壮大な景観であり、その姿を見ることによつて地域や人とのつながりを学び、自己を反省するために生まれたものだということ。すでに過去のものである作品ではなく、これから先もずっと素晴らしい芸術の源泉でいられるように、傷だらけの富士山を守るために行動することが大切であり、それが今を生きる私たちの義務と責任でもあるのです。

## “水がめ”は偶然なる火山の恵み

富士山の中腹以上の年間平均降水量は二八六〇ミリ。日本の平均の年間降水量は一七〇〇ミリですから、日本の平均の一・七倍近くの雨や雪が降っていることになりました。こうした雨や雪の恵みを受けた、富士山域の湧水量は一日当たり五三四万トンと推計されています。一人一日四〇〇リットルの水を使うとすると、一日当たり一三四〇万人も水を富士山に蓄えているのです。まさしく、富士山は巨大な「水がめ」といえます。

富士山は過去に何度も噴火を繰り返し、火山弾、火山岩、火山礫、火山灰などが積み重なってスポンジのような透水性の層状となり、最後に溶岩が流れ込んで固い岩盤を形成しました。そして、再び次の噴火でスポンジと岩盤が重なり、それが何層にも積み重なる。そこに降った雨や雪はスポンジ層に浸透し、その間を流れてる過され、あちらこちらの場所に水が湧き上がります。富士山圏域に水を供給してくれるこの地下水供給システムは、

火山学的な偶然性によってでき上がったもので、ありがたいことに私たちは偶然に「水の山」となった富士山のおかげで生活できているのです。

富士山の信仰上でも湧き水が重要な役割を担ってきました。富士山本宮浅間大社が現在の地に建てられたのは、富士山の水がこんこんと湧く場所だったからといわれています。湧玉池と名付けられ、水源の岩の上には水屋神社があり、古くから登拝者はここで禊をして登る習わしがあります。そのほか、富士山の伏流水が湧く忍野八海も登拝者たちがけがれを払う場所、また、約二〇〇メートルにわたって湧き水が噴出する白糸の滝は、長谷川角行の修行の地で、登拝の際の巡礼地とされました。

周囲に暮らす人々の飲料水としてはもちろん、農業用水・工業用水としても富士山の地下水は欠かせません。さらには駿河湾の海中でも湧き出ている、桜エビやしらすなどの豊富な海の生き物たちに豊かな酸素を供給しています。沼津市の平沢地区の海中には海岸近くに水が湧き出る場所があるのですが、冬は僅かに海面がもり上がり、湧き水は空気とミナラルをたっぷりと含んでいるので魚が集まりやすく、そこに生息している珊瑚は緑色に変色をしていて、世界的にも珍しい緑珊瑚の群落となっています。

この平沢地区を含めた三浦・大瀬地区エリアの漁業組合は、古くから、駿河湾に水を注ぐ流域となる愛鷹山あしたかに森林を所有し、海の守護神としての「水神様」を祀ってきています。昔の人は、自分たちの漁場に流れ出る黄瀬川きせを通して、愛鷹山の森や富士山の森とつながっていること、森と川と海との生態系の循環により豊かな海が守られていること、森の豊かさは海の豊かさとながり共生していることを生活の知恵として知っていたのです。

ところで、この富士山の地下水は、一体、どのくらいの時間をかけて、上流域から下流域に流れ下ってきているのでしょうか。ひとつは、二〇年から三〇年近くの歳月をかけて、ゆっくりと溶岩の亀裂や隙間を流れてくるとの説である、地下水の「長期流動説」があります。一方で、上流域の降雨と下流域の井戸の地下水位との相関関係を分析した結果、双方のピークが七〇日から九〇日程度ずれて見事に重なり合うことから、「短期流動説」も信じられています。

下流域の「水の都三島」において子ども頃の頃を過ごした「水飢鬼」を自称する私にとっては、七〇日から九〇日くらいの時間をかけて、上流から地下水として流れ下っていると短期流動説が、現場感覚として整合性が高いのではと考えています。ともあれ、富士山周辺において、上流と下流の地下水をめぐる「南北問題」を発生させることなく、上流も下流も「運命共同体」であるとの共有意識や一体感を持つことが大切です。

現代に入ると、豊富で便利なこの地下水供給システムを活用しようと、富士山の周囲にはさまざまな企業が工場を造り、産業経済活動が活発化しました。飲料水を汲み上げるほか、製紙や精密機械などの工業用水も支えてきました。ただし、企業の地下水の利用によって、湧水の減少や塩水化などの問題が発生しています。豊かな水資源の現状に甘えた収奪的な産業経済活動を改め、資源循環型の活動への転換と節水対策の推進など、新たな地下水供給システムの構築が求められているといえるでしょう。

また、富士山の新たな見方として、確かに、その標高は三七七六メートルですが、稜線は駿河湾の海中まで延びていて、驚くことにそれは水深三七〇〇メートルまで入り込んでいます。合わせるとエベレスト級の山となる、まさに巨大な火山です。海と共生し、豊かな自然空間を持つ森林地帯が広がり、裾野には八〇万人近くの人々が暮らし、地下水利用型の企業活動が営まれるなど、自然と人間が一体化した生態、生活空間が広がっています。

その複雑な空間の中で、人々が、すべての資源の源泉となる富士山に対して、どのよ

うな認識と問題意識を持ち生きていくのか。今、現出している多様な環境問題をどのように解決していくのか、そして、世界の宝物となった富士山をどのような環境基準により守り伝えていくのか。日本人の心の拠り所ともなっている宗教的な伝統文化の継承を含めて、その対応策に、世界から厳しい評価と刃が突きつけられ、日本人の真価が試されている正念場だといえます。